

# 金銀鉱山一、〇〇〇年の遺産群

文——伊東孝 Takashi Hobo ● 日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授

写真——西山芳一 Hoichi Nishiyama ● 土木写真家

佐渡の鉱山開発の歴史は、古い。『今昔物語』にまでさかのぼることができる。今から一、〇〇〇年前の話だ。東京人の感覚でいえば、当時の鉱山跡は長い年月の間に土で覆われ、樹木が生茂り、ないしはあらたに開発されて跡形もないと思っていたが、然に非ず。時代によって採鉱地域は大きく変わったが、それぞれの時代の遺跡や遺構が残っているのだ。圧巻は、一、〇〇〇年前の平安時代の金山跡や中世の頃の銀山跡が残されているということ。

佐渡には神社仏閣が多い。一獲千金を夢見た山師は、神さま仏さまに願懸けしただろうし、真つ暗な坑内で働く鉱夫たちは神社仏閣に命を託したにちがいない。寺院数は、江戸時代五三九カ寺を数えた（今日でも三二〇カ寺が健在）。清水寺、長谷寺もある（「せいすいじ」「ちようこくじ」と読む）。同時代の神社数は不明だが、現在三一八社ある。

の砂金採り道具が残る。山中を歩けば、石と砂金を分離するために水を貯水した受堤（ダム）跡や水路跡、コの字型の石組（作業小屋跡？）などとともに、崩れて形がわからなくなったおびただしい石がここかしこに苔むした姿で転がっている。

新穂銀山のあった新穂村のキャッチフレーズは、「トキと鬼太鼓」。小佐渡の中央部にあって、村の面積を山林（六五％）と農地（二五％）で占めるのどかな農村である。国際保護鳥のトキが飼育されているのもうなずける。鬼太鼓とは、初代佐渡奉行の大久保長安とともに来島した二

## 西三川の石組遺構

用途は不明だが、簡単な小屋掛けがされて、鉱夫たちの休息所、砂金採取の用具置場や修理場など、さまざまな用途に用いられたと考えられる。



## 南沢疎水道

坑内排水用につくられた坑道で、高度な掘削技術と測量技術の証のひとつ。両端と堅坑から掘り進む「向掘り工法」で、全長1kmを掘削した。当時、世界最高の技術といわれる。

佐渡金山のシンボルである道遊の割戸や訪れる人の少ない滝裏の間歩跡などを見ると、むかしの人（鉱夫）は、どのようにして掘ったのだろう、いやその前に、どのようにして金銀の埋蔵場所を見つけたのだろうか。金銀鉱山跡地は、世界の歴史を動かしてきた人間欲望の聖地に想いを致す場所でもある。

『今昔物語』（十二世紀前半）にも登場する小佐渡の西に位置する西三川地区は、「金の島」伝説を生んだ場所といわれる。朝日に反射してキラキラ光る砂金が、水田一面に広がっていたという。金山開発では一番古い歴史をもち、当初は地表面を削って砂金採取をおこなった。開発には、尾張国（現愛知県）の山伏たちが関わったといわれ、荒神山や阿弥陀堂など修験信仰の証も残る。山肌が削り取られた虎丸山が象徴的にそびえ、麓のひそやかな笹川集落には（土砂掘りの）鶴首（砂と砂金を分離する）汰板など



## 虎丸山と笹川集落

虎丸山には、山肌の削り跡が今も残る。手前の水田に朝日が当たって、キラキラと砂金の光る光景を、ふと想像する。



**大滝間歩跡**

鶴子銀山で確認できる最大の坑道。鑿跡も残る。入口は滝の落ち口の裏側にある。鉱山は岩が安定しているので、坑木がないのが特徴だ。周辺にある石積み擁壁のテラス遺構が盛況時を物語る。

人の能楽師が広めた能舞に、各地の太鼓と独特の振付がなされたものといわれ、現在でも島全体で一二〇組もあるといわれる。

村内の根本寺や清水寺などを訪れると、かつての栄華ぶりが腑に落ちる。社寺境内や伽藍がきれいに整えられ、掃除の手も行き届く。ここは歴史が連綿と息づく場であり、静謐な空間と佇まいをゆっくり楽しむにはもってこいの場所である。

一五四二年に発見され、佐渡でも古い歴史をもつ鶴子銀山は、相川鉱山とは尾根を挟んだ反



**道遊坑の坑内**

トロッコが放置され、平成元(1989)年の閉山時のままである。坑内には鉱脈を求めて掘られた坑道が枝分かれしている。地盤の悪いところには坑木が設置された。

対側に位置する。江戸初期(慶長〜寛永)の最盛期、「鶴子千軒」といわれた。山の中には、たくさんの採鉱跡があるが、はじめての人にはわかりにくい。しかし見なれてくると、露頭掘りの跡や問歩などを見つけることができる。採鉱法にしても、「露頭掘り」と(横掘りの)「坑道掘り」との中間技術である「鑿追掘り」(露頭の鉱脈に沿って掘る方法)跡などが残り、採鉱技術の変遷が具体的にわかる。このような採鉱跡が六〇〇カ所以上もある。中でもお勧めは、滝の落ち口の裏側に位置する大滝間歩跡だ。周囲



**新穂にある清水寺の救世殿**

清水寺は「せいすいじ」と読むが、救世殿はあきらかに京都の清水寺をモデルとする。清水寺の特徴である、懸崖造りの舞台をもつ。元和8(1622)年の竣工。

にある石積み擁壁でつくられたテラス遺構も見ごたえがある。

佐渡最大の金銀鉱山として知られる相川鉱山は、江戸初期に発見され、ここで採れた金銀は、鎖国政策をとった江戸幕府三〇〇年の財政を担った。幕府が直轄管理し、当時の最先端技術を駆使して開発を推し進めた。先端技術は、「採鉱」「選鉱」「精錬」の金生産の各段階に及び、日本最大の採掘量を誇った。石見の銀山奉行であった大久保長安が初代佐渡奉行につき、石見銀山で使用されていた坑道掘り技術が導入された。坑道掘りは見えない鉱脈に向かって掘り進むので、オランダの測量技術を改良した高度な測量技術が併用された。精錬技術では、同じく石見銀山から導入された灰吹法を改良して、銀を多量に含む佐渡特有の金鉱石を精錬するため金銀灰吹法と焼金法が考案され、純度の高い金を生産した。

相川鉱山は、近代の鉱山遺構が大型機械とともに数多く残る場所でもある。遺構群をめぐると、一気に一番上の大立堅坑に向かうに限る。金鉱石の採取からはじまり、下るにつれ、破碎・選鉱、精錬されて金に至る生産工程がわかるからだ。

大立堅坑と地下捲揚室、ここから佐渡鉱山のシンボル・道遊の割戸と青盤脈の鉱脈面も望める。観光坑道の鉱山入口を過ぎると、中腹には高任粗砕場と貯鉱舎、ここから坂道をのぼって機械工場、さらに山道をのぼると大立堅坑とは逆の位置から割戸をながめられる。しかも割戸の下に掘られた明治期の大露天掘り跡も見ることが出来る。鉱石運搬路の軌道盛土やトンネル・橋などを見ながら下に降りれば、北沢の製錬所跡に至る。斜面にテラス状に構築されたコンクリート遺構とともに、直径五〇センチのシクナー(比重差を利用する金成分の濃縮装置)が、北沢を代表するランドマークになっている。さらに海岸に近付けば積出港になった相川港に至る。「佐渡鉱山の遺跡や建造物・集落は、他のアジア地域の鉱山においては今や見ることできない極めて希少な遺産」と、文化遺産オンラインは要約する。

■参考文献

西山芳一、写真集「佐渡鉱山」新潟日報事業社、二〇一一年

